



顔の見える支援方法とは

NPO10年アリガトウ・プロジェクトの支援先は、岩手県大船渡市。先月、アルゼンチンの学校から届いた手紙と義援金を今野教育委員長様に手渡した後、市内と隣の陸前高田市を車でまわる。

今春また瓦礫はすっかり取り除かれ更地が広がる。パチンコ屋だったらしい跡地に、[閉店アリガトウ御座います]の看板がぼつねんと立っている。ここに通ったのはまさか土地の人ではあるまい。瓦礫撤去に従事した会社の従業員たちだろうか、等等複雑な思いが駆け巡る。

JICA恒例の海外日系人大大会が霞ヶ関の憲政記念館で開催され、ブラジル日本都道府県人会連合の副会長・本橋幹久氏にお会いした。

昨年3.11東日本大震災に対し、日系ブラジル人グループから6億円の義援金が赤十字を通して送られたが、被災地にはこの事実が伝わっていない。

こうした状況の中で海外最大の日系社会である日系ブラジル人グループの代表は、今秋の海外日系人大大会のスケジュールに、東北応援ツアーをはめ込み岩手県釜石市、陸前高田市、宮城県女川市、石巻市、名取市、福島県いわき市を視察した。

そして、来年、被災3県から25歳までの若者を招聘し、復興に向けてどの様に考え2年間生活してきたかをブラジルの同世代の若者たちに、講演してもらい交流事業を被災3県庁の国際交流課に提案した。そうすれば日本国内だけではなく、ブラジル日系人の間でも支援する人たちの輪が広がっていることが実感でき、次世代育成にも効果がある。

ブラジルに移住した日本人移住者は異境の地で「七転び八起き」の不屈の精神で現在の地位を築いてきましたが、そのバイタリティーあふれる姿に接してもらうことにより、夢と希望を失わなければ、未来が開けることを肌で感じることができると思います。

サンパウロからJALの直行便が廃止され、中東経由の長旅に疲れも見せず具体案を話される本橋幹久氏の言葉に胸が熱くなる。

国内でも赤十字を通して義援金はどう生かされたか見えず、被災地を直接、支援する仲間がいる。

被災した漁師の船に企業のロゴを貼り、義援金に感謝の気持ちを示すプロジェクトだが、このアイデアを考え出したのは、岩手県盛岡市で靴屋を営む菅原誠さん。震災後、菅原さんのもとには、イタリアの取引先から多くの義援金が寄せられ赤十字に届けたが、どう生かされたのか見えず歯がゆく感じていた。

被災地に靴を届ける活動の中で、大船渡市で漁船を失った漁師と知り合い、自前の船で漁にでたいと強く願っていることを知る。そこで菅原さんは船体に広告を掲示し、支援したい企業と、漁師を直接つなぐ企画を編み出した。

大船渡市小石浜地区はホタテ養殖が盛んな地区。養殖組合ホタテ部長の佐々木淳さんは、昨年11月、白地に青で「ADBOAT」と書かれた船を沖にだした。

漁師にとって漁船は相棒であり分身の存在。当初、佐々木さんにもこの提案に抵抗がなかった訳ではない。しかし漁師は一端、海にできれば競争相手だが、同じスタート・ラインに立つ船がなくては海の男の勝負もできない、と思い返し決意した。

国は漁船や漁具の共同利用を促す事業を推し進めているが、菅原さんが酒を酌み交わし、漁師の本音を聞きだしたことで、ADBOATのアイデアが生まれ漁師たちを勇気付けるプロジェクトが立ち上がった。

1985年に開業した「小石浜駅」は、2009年、佐々木淳さん達の若い仲間が、三陸鉄道と交渉し「恋し浜駅」に改名。この洒落た名前が功を奏し「恋人の聖地」として多くのカップルや鉄道ファンが下車するようになり、2010年には「幸せの鐘」も設置された。地元の名産品を使った「ホタテ貝の絵馬掛け」も名物になり関係者がホッとした矢先の3.11東日本大震災。

11月9～11日、首都圏のイベントで寄せられた被災地復興を願う「ホタテ絵馬」300枚が恋し浜駅に奉納された。絵馬には「三陸の復興を願う」「普通の生活に戻れますように」など復興へのエールが満載。「結婚できますように」など本来の「恋愛のバウスポット」向けの内容も並ぶ。

来春に「恋し浜駅」が再開するニュースを知らせる佐々木淳さんの声が、受話器の向こうで響いている。

Michi recommends 響く本ヘレナさんの『幸せの経済学』



ヘレナ・ノーバーク=ホッジ (Helena Norborg - Hodge)

スウェーデン生まれ。言語学者。ISEC(エコロジーと文化のための国際協会)代表。グローバリゼーションに対する問題提起や啓発活動を行っている世界的なオピニオンリーダーの一人。

1975年にラダックに入り、ラダック語・英語辞書を作成。もう一つのノーベル賞と呼ばれるライト・ライブラリー賞を1986年に、五井平和賞を2012年に受賞。著書『ラダック 懐かしい未来』(山と溪谷社)は30カ国以上で翻訳され、『幸せの経済学』(大月書店)は映画となり世界中で上映されている。

いよいよローカルの時代

今日、いくつもの危機を抱えこんでしまった世界で、あなたが無力感を感じたとしても不思議ではありません。たしかに危機は深刻です。世界の危機は、誤った経済システムとそれに基づく一連の政策によってつくり出されたもの。そして、この経済システムのとは、人間ばかりかほかの生きものたちの本性に逆行するようなものなのです。ここにこそ希望があると私は思っています。だって、人間の本性を変えることはむずかしくても、人間がつくった体制や政策を変えることは、ずっと容易なはずだから。私はこれまで35年にわたって、世界中のさまざまな国や地域で仕事をしてきました。その仕事とは、それぞれの文化の独自性を尊重し、コミュニティを守り、育て、ローカルフード(地産地消)を軸にした地域経済を推進するお手伝いをすることでした。各地で出会った人びとの勇氣、知恵、忍耐力こそが、常に私を導いてくれました。日本、そしてそこで出会った人びともそうです。日本は他の国々と同様、グローバル経済の熾烈な競争にさらされながら、社会の変化を余儀なくされてきました。それでも、日本古来の伝統的な価値観には、時の試練になんとか耐えて今につづいているものが少なくありません。来日のたびに私はそのことに感銘を覚えます。家族やコミュニティの結びつきはなお強く、私がこれまで見てきた国よりもしっかりと社会的

な一体感を保っています。そしてそれが、グローバル経済の破壊的な影響に対する抵抗力となり、日本がより健全な社会をつくり出すために必要な力となっている。日本はそういう力を備えた希有な国だと私は思っています。とはいえず、経済システムとグローバル化がもたらすマイナスの効果と、社会のあらゆる側面に表れているという点で、日本も例外ではありません。ほとんどの家族の上のしかりかかる経済的圧力によって、親たちは子どもたちといっしょに過ごす時間さえ奪われています。その結果、ますます多くの幼い子どもたちが長時間、託児所等に送りこまれ、あるいはテレビやテレビゲームという名の子守りとともに置きざりにされている。コミュニティと自然という、子どもたちが幸せであるための重要な基本的要素から、彼らはますます疎遠になっています。

かつて世界中の子どもたちが尊敬し、生きる模範としていた家族や親戚や隣人たちは、いったいどこへ行ってしまったのでしょうか。彼らの代わりに、現代の子どもたちの価値観を左右しているのはグローバルな消費者文化です。その消費者文化が子どもたちの嫉妬心をあおり、彼らをますます孤立させ、不安定な状態に追いこんでいる。それが学校や職場での競争のプレッシャーと相まって、多くの若者に破壊的な影響を与えているのです。アメリカとイギリスと同様、日本でもうつ病が蔓延しているそうですね。グローバル経済システムによる環境破壊の深刻さを知って、あなたは絶望しているかもしれません。でも、やはり希望はあるのです。それが宿命のようなものではなく、経済システムによって引き起こされたという事実。そして、この経済システムを変えさせなければならないのだと、ますます多くの人びとが目覚めはじめていることに。すでに人びとは、実際に新しい経済をつくるために動きはじめています。国や国際社会の政策を変えるための運動と並行して、草の根のレベルでも各地域のローカリゼーションに向けた力強いムーブメントが起ころうとしています。その中心には、農業の多様性、地域の再生、消費者と地域のつながり直しを推進するローカル・フード運動があります。世界的な潮流の中で、日本のみなさんが果たす役割は大きいものになるだろうと、私は考えています。長い歴史を誇る日本文化の基底にあるホリスティックな世界観が、現代社会が抱える問題の本質を深く問い、グローバル化による過剰の過ちを見抜き、新しい世界への大転換のための指標を与えてくれるのではないのでしょうか。



東日本再生への願いを込めて



「海外最大の日系社会」
ブラジル日本都道府県人会連合会主催

2012年「東北応援ツアー」を実施



今後の支援方法を再考するため、日系ブラジル人グループと被災地を視察されたブラジル鳥取県人会の本橋幹久氏と憲政記念館で。

ブラジル日本都道府県人会(園田昭恵会長)主催の『東北応援ツアー』が14日から始まる。東日本大震災地(岩手、宮城、福島)を訪問して支援を声明するほか、30日から東京で行われる『第53回海外日系人大大会』にも参加する。また、被災3県庁に対し、若者を対象とした伯国への招聘事業を提案することも決定。来年の日本祭り開催時期に合わせ、約2週間のプログラムを想定していることを説明する。

県連関係者の話によれば、応援ツアーが企画された背景には「顔の见えない義援金」の存在があった。日系社会を中心に昨年は伯国から総額6億円に上る義援金が、日本赤十字を通して被災地に送られた。ところが、それがどう使われたかといった報告もなく、日本屋内で当地からの義援金が広く周知されることもなかった。

過去最多といわれる義援金が集められたのは「心情的にも日本に寄添いたい」という気持ちかが強かったからであり、送金後の音沙汰が皆無であることに、義援金を寄せた人々からある種の寂しさを伝える声が多くあった。そういったコロナの心情を汲みとり、顔が見える形で当地からの応援の気持ちを伝えるツアーが企画され、6月から応募が行われて来た。

一行は岩手県釜石市、陸前高田市、宮城県女川町、石巻市、名取市、福島県いわき市などの被災地を訪問し、視察を行うほか、希望者は30～11月1日に東京の憲政記念館などで開かれる『第53回海外日系人大大会』にも参加する。

※中面へ続く

